

2025年12月28日 歳末礼拝(降誕節第1主日礼拝)メッセージ
「旅人からのプレゼント」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 2章 1-12節

今年も残すところ4日となり、年の瀬となりました。先週がクリスマスでしたが、教会の暦では年明けの1月6日の「エピファニー(公現日)」までが、クリスマスの期間です。とはいっても、アジアの国々でも、1月に「お正月」を迎える国と、2月頃に「旧正月」を迎える国とがあるように、キリスト教でもローマ・カトリックや聖公会、プロテstant教會などの西方教会が12月25日にクリスマスをお祝いするのに対して、ギリシア正教やロシア正教など、日本では「ハリストス正教会」と呼ばれている東方教会では、使っている暦の違いから1月7日にクリスマスをお祝いします。そのように、地域や歴史、文化によっても、クリスマスの受け止め方は異なっています。ですが、2000年前の古代イスラエルにおいて、実際にあったことは一つでした。私たちは福音書に記されている記事から、そのことに立ち返りたいと思います。

今回のお話は「マタイによる福音書」から、「3人の博士たち」のお話でした。子どもたちが演じるペーペント(降誕劇)では、馬小屋でイエス様を出産したマリアとヨセフの所に、野原から羊飼いたちがお祝いに駆けつけ、続けて遠い東の国から3人の博士たちがやって来て、役者たちが勢揃いして大団圓を迎えます。しかし、考えてみると、出産後すぐに駆け付けた羊飼いたちがいる同じ頃に、遠い国から駆けつけてくることは出来ませんから、博士たちが出発したのはもっと前だったとか、博士たちが到着したのはイエス様が誕生してから12日目だったとか、様々なことが考えられてきました。

そもそも「博士」(マタイ2:1)という翻訳も奇妙です。「学者」「賢者」「博士」などと訳され、「王」という訳もありましたから、劇では3人の頭には冠があつたり、豪華な衣装を身に着けていたりしますが、元々のギリシャ語(マギ)では「占星術の学者」と言いますか、要するに「星占いの占い師・呪術師」たちでした。もちろん、科学が発達していない古代社会なので、占星術も呪術や魔術も、科学も医学も、全部一緒と言えば全部一緒かもしれません。ですが、古代イスラエルの人々の感

覚としては、「星占い」や「呪術」、「まじない」というものは、異邦人の忌むべき慣習として、ひどく忌み嫌われており、律法で禁じられていました（申 18:10～12、レビ 19:26、民 23:23）。ですから、生まれたばかりのイエス様の所にやって来たのは、遠い東の国の王様たちや貴族階級の博士たちではなく、怪しい異教徒の占い師たちだった……。それが実際にあったことでした。

彼らは東の国で、新しい星の輝き、珍しい星の運行を目の当たりにして、わざわざ砂漠を越えてユダヤの国までやってきました。当時から砂漠を越えるキャラバンなどはあったでしょうが、当然死と隣り合わせの命懸けの旅でもあったでしょう。何が彼らを突き動かしたのでしょうか。異国に暮らす異教徒たちにとって、ユダヤの国に新しい王様が生まれようが生まれまいが、そんなことは関係ないことだったはずです。それにもかかわらず、彼らはじっとしていることが出来ませんでした。それはイエス様が、ユダヤ人だけではなく世界中の全ての人々を救う神の子だということが、占いによって分かっていたから、ということではなく、もっと単純に彼らのそれまでの経験上、観測史上、全く見たことのないような星の輝き、運行が見えたからだったのではないかでしょう。その星の方角に何があるのか、自分たちで実際にやって確かめてみたい。そのような思いで居ても立ってもいられなかったのでしょう。その星の輝きとは何だったのか、現代の天文学でも、何かの彗星だったのか、超新星爆発だったのか、紀元前2年頃の金星と木星の大接近だったのか、など議論が続けられているのだそうです。

いずれにせよ、東の国からユダヤにやってきた占い師たちは、まずは領主であるヘロデの所にやってきました。新しい王は、お城、宮殿にいるとえたのでしょうか。ヘロデは彼らの話を聞いて、怪しいと感じながらも、もしも本当に新しい王が生まれたのであれば、自分の地位が脅かされたり、反乱を企てられたりするかもしれない、と考えたのでしょうか。祭司長たちや律法学者たちを集めて、ヘブライ語聖書の預言書から、メシアはベツレヘムに生まれるということを調べさせました（4-5）。そして占い師たちに、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。私も行って拝むから」と言ってベツレヘムへ送り出しました（8）。おそらく、彼らが戻ってきたら、すぐにイエス様を殺害しにいく算段だったのでしょう。

さて占い師たちは、ヘロデに教えられた通りベツレヘムへ向かい、そこで母マリ

アと共にいた幼子、イエス様に会うことが出来ました。そして彼らは持ってきた宝の箱を開けて、「黄金、乳香、没薬」を贈り物として献げました(9-11)。それから、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分の国へ帰って行きました(12)。劇では3人の博士が、観客からよく見えるように、大きな宝箱をもって、マリアと赤ちゃんイエス様に対して恭しく宝物を献げます。降誕劇ではそもそも東の国で大きな星を見た時から、「イエス様に会いに行こう。これらの宝物をお献げしよう」と計画して出発して来ているわけですが、しかし、実際にはそんなことはなかったのだろうと思います。「黄金、乳香、没薬」というのも、それぞれ「王権の象徴、祭儀の象徴、受難の象徴」としてイエス様に献げられるべくして献げられたものだという解釈もありますが、それらは後付けて考えられた解釈に過ぎません。

現代の聖書学では、歴史的事実としては皇帝の勅令による人口調査もありませんでしたし、領主ヘロデによる赤ん坊の大虐殺もありませんでしたし、イエス様はナザレに生まれ育ち、エジプトに逃れることも無かつただろうと考えられています。それにもかかわらず、「マタイによる福音書」は、イエス様をヘブライ語聖書の預言の成就として描くことにこだわっています。そのため、「新しい指導者はベツレヘムに生まれる」というミカ書(5:1)の預言の成就として、イエス様の誕生の舞台をベツレヘムとして描き、また「終末の時、救われたシオン(エルサレム)に、異邦人たちが、黄金と乳香を主に献げる」というイザヤ書の預言(60:6)の成就として、この占い師たちによる献げ物の場面が描かれたのだと考えられます。

実際にあったのは、ようやくイエス様に会うことができた彼ら、占い師たちは、とても喜び、思わず身に着けていたもの、懐に持っていたものを記念として差し出した、ということだったのだろうと思います。砂漠を越えるような旅ですから、荷物はできるだけ少ない方がいいですし、大きな宝箱のような目立つものはすぐに盗賊に襲われかねません。そもそも王族や貴族ではない、貧しい怪しい占い師たちですから、大きな宝箱なんて持っているわけもありません。旅の道中で何か困ったことに遭遇した時に、物々交換することができるように、高価なものとして指輪や耳飾りのような金と、そもそもが樹脂ですから大量には採取することが難しい乳香、没薬を彼らは大事に懐にしのばせていましたのでしょうか。

彼らは、イエス様と出会ったことで、それまでの星を頼りとする生き方、黄金や乳香や没薬という高価な金品を頼りとする生き方から変えられました。そして、それらを頼りにする古い自分たちを脱ぎ捨てて、別の道を通って帰って行きました。イエス様と本当の意味で出会った人は、変えられます。自分の意図とは関係なく、変えられてしまう。変わらざるを得なくなる。それが真理との出会いということであり、だからこそ古い生き方から救い出して下さる「救い主」だと言えるのではないかと思います。

イエス様を探して旅をして、そして見つけ出し、出会うと、自分自身の生き方が変えられる。そしてそれまでとは別の道を歩むようになる。それは 2000 年前の占い師たちだけではなく、現代に生きる私たちにとっても同じことではないでしょうか。遠い東の国からやって来た旅人たちからのプレゼント……。彼らは献げ物をするために来たのでもなく、献げ物をしたから変えられたのでもありませんでした。むしろ新しい生き方、新しい自分をイエス様の方からプレゼントされて、それによって古い自分を脱ぎ捨てることができた。本当に大切なものは何か、考えを改めることができた。別の生き方、別の道へと歩み出せるように変えられたのだろうと思います。

もうすぐ終わろうとしている今年、2025 年の 1 年間を振り返り、私たちは何か新しい道へ歩み出せたでしょうか。脱ぎ捨てたい、もしくは捨て去りたい生き方は何かあったでしょうか。世界の各地で災害が起こり、また戦争も止んでいません。世の中には不安が渦巻き、その一方では力強さを誇示するような指導者によるファシズムが台頭してきています。そのような時代の中で、真理はどこにあるのか。神の言はどこにあるのか。新しい年を迎えるにあたって、これまで自分が頼りにしてきていたものにこだわるのではなく、神様が導いてくださる道へと歩みを進め、神様が出会わせてくださる出会いを大切にしていきたいと思います。私たちは今日もここから、神様と共にあって、歩みを進めて参ります。